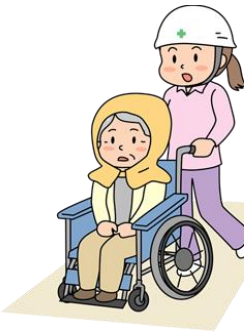
にじが丘自主防災会だより　NO. 2

令和　２年　８月１５日
発行者：自治会自主防災会
発行責任者：小田　徳美

にじが丘防災士会を開きました。



令和２年度の防災士会を８月１日（土）１６時から開催しました。今回の会議では、まさかの災害時に要支援者をどのように誘導するかを協議する課題があるので、にじが丘の民生委員さん２名にも出席いただき、独居高齢者の事や高齢者夫婦の様子などについて、個人情報の詳細には触れず、情報提供できる範囲でアドバイスを頂きました。

今回の会議では、本来、各防災士８名がこれまで分担している大分市の「要支援届出者」の情報整理及び、年一度、自治会長同伴で要支援者宅訪問を行っている、その実施日程を協議する計画でした。しかし、昨今の新型コロナウイルス感染拡大が大分県内でも連続して再発しているため、訪問先様にご迷惑をおかけしないよう、今年度は、訪問を中止することとしました。

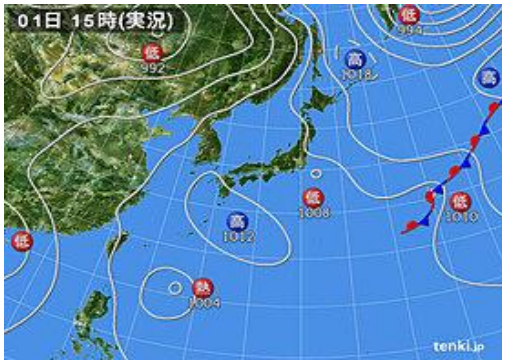
災害時「要支援者」誘導についての課題も話し合いました。

現在、にじが丘自治会内には、７０歳以上の高齢者が３０２人(令和２年８月現在)居住されており、老人会には１７４名が加入されています。なかでも、高齢者単身世帯や高齢者夫妻のご家庭がお元気に暮らしておられます。

その内、高齢単身者は、民生委員さんが日ごろ支援されていますが、それ以上に高齢者二人所帯の情報はありませんから、万が一この地域が被災するという場面で、どのように「共助」の役割を働かせることが出来るのか、これから研究・検討が求められています。

にじが丘では、サロン委員会が中心となって「交流サロン」を実施していますが、コロナ禍では、ますます外出が難しく動けなくなる一方です。そうした高齢者への対応・対策が、自治会及び自主防災会としての大きな課題です。

「梅雨明け宣言」出ました。



「梅雨明け宣言」の日の天気図

ふた月前の６月１１日に九州北部地域が、梅雨入りしましたが、今年は、例年になく７月下旬まで長期間の梅雨となりました。九州北部地域は、７月 30 日にやっと梅雨明けが宣言されました。

この梅雨期間に県内では多くの地域で水害が発生しました。そして、多くの被災地と犠牲者をだしてしまいました。

また、８月に入り台風４号が発生しています。今年は、７月末まで日本列島に襲い掛かる台風の発生がありませんでした。

過去の歴史を辿ると、そうした年は逆に８月以降に数多くの台風襲来があると言われますので、台風情報には要注意です。その意味では、いざという時の「マイ・タイムライン」の作成が重要になっていると思います。

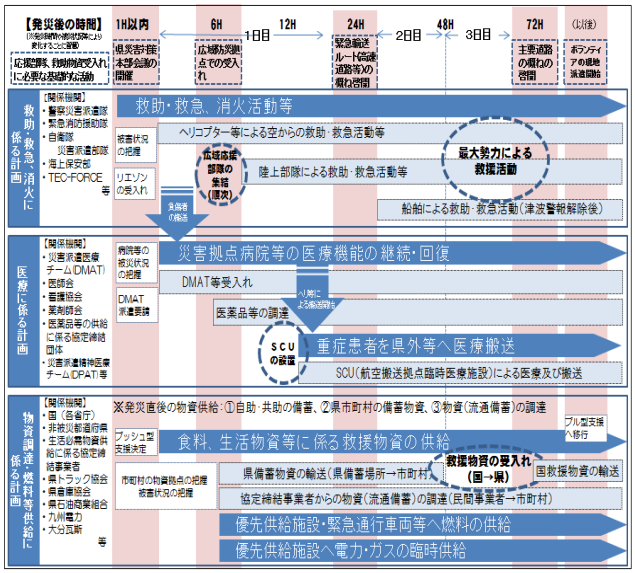
（裏面につづく）

「マイ・タイムライン」は……。

マイ・タイムラインは、住民一人ひとりのタイムラインであり、台風などの接近によって河川の水位が上昇する時に、自分自身がとる標準的な防災行動を時系列的に整理し、とりまとめるものです。時間的な制約が厳しい洪水発生時に、行動のチェックリストとして、また判断のサポートツールとして活用されることで、「逃げ遅れゼロ」に向けた効果がとても期待されています。

実際、防災演習（研修）などで、災害想定に基づき「実際にどう動くか」学習しながら災害時行動を時系列的に取りまとめる経験ができます。　（参考：県 HP から転載）

県の主な応急対策活動のタイムライン（イメージ）



「令和2年7月豪雨災害」について

令和２年７月豪雨は、７月３日から７月 31 日にかけて、熊本県・大分県を中心に九州や中部地方など、日本各地で発生した集中豪雨です。

命名は７月９日に、当時継続中だった大雨を気象庁が行い、８月４日には豪雨の期間を７月 31 日までの間と発表したものです。

球磨地方はもとより、大分では天ヶ瀬地域や由布市が大きな被害を受けています。

日田市天瀬町
温泉街の右岸左岸を結ぶ鉄橋が壊滅的被害に

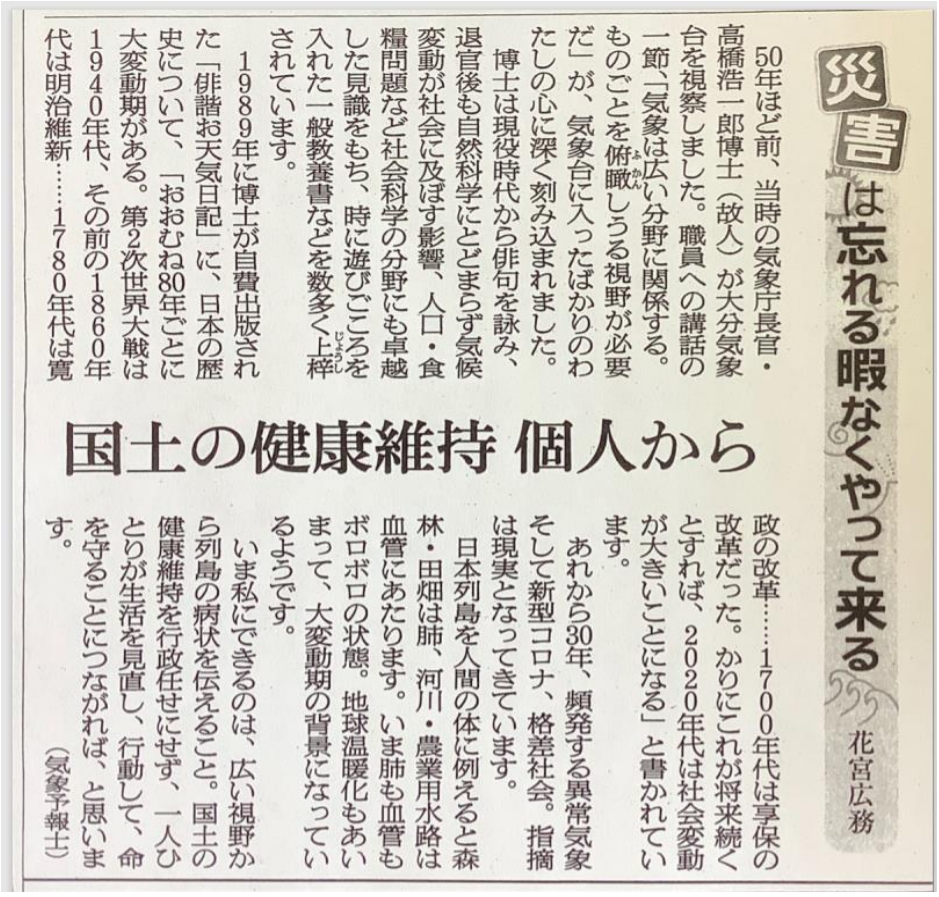
由布市庄内町
小野屋地域の大分川が氾濫。右岸左岸を分断

我が家の防災対策

いざ避難！の準備お済ですか？

防災士　小嶋　秀行

とりあえずの品揃え



災害は忘れる暇なくやって来る

花宮広務

50年ほど前、当時の気象庁長官・高橋浩一郎博士（故人）が大分気象台を視察しました。職員への講話の一節「気象は広い分野に関係する。ものごとを俯瞰（ふかん）しうる視野が必要だ」が、気象台に入ったばかりのわたしの心に深く刻み込まれました。

博士は現役時代から俳句を詠み、退官後も自然科学にとどまらず気候変動が社会に及ぼす影響、人口・食糧問題など社会科学の分野にも卓越した見識をもち、時に遊びごころを入れた一般教養書などを数多く上梓（じょうし）されています。

1989年に博士が自費出版された「俳諧お天気日記」に、日本の歴史について、「おおむね80年ごとに大変動期がある。第2次世界大戦は1940年代、その前の1860年代は明治維新……1780年代は寛政の改革……1700年代は享保の改革だった。かりにこれが将来続くとすれば、2020年代は社会変動が大きいことになる」と書かれています。

国土の健康維持 個人から

あれから30年、頻発する異常気象そして新型コロナ、格差社会。指摘は現実となってきています。

日本列島を人間の体に例えると森林・田畑は肺、河川・農業用水路は血管にあたります。いま肺も血管もボロボロの状態。地球温暖化もあいまって、大変動期の背景になっているようです。

いま私にできるのは、広い視野から列島の病状を伝えること。国土の健康維持を行政任せにせず、一人ひとりが生活を見直し、行動して、命を守ることにつながれば、と思います。

（気象予報士）

大分県防災アドバイザー　花宮広務さん（元大分気象台長）連載（朝日新聞）